



自分の体を知りたいという気持ちが母親たちに広まりつつある



医療機関でも研修を行っている。医師や看護師などが対象だ

一方、お産婆さんの中には先祖代々、赤ちゃんを取り上げる役割を担ってきた、地元社会の中心人物も多い。そこで、地域の保健事務所に登録しているお産婆さんを対象に研修や活動支援を行った。その結果、お産婆さんのスキルが上が

地元のお産婆さんや先輩ママとも連携

併せて、モデルクリニックの設置や不足していた医療器材の提供に加え、医療機関での医師・看護師の研修なども実施。2010年と比べて、12年には各県で妊産婦死亡率が24〜34%減少した。

「病院でのお産を普及させるためには、例えば、地元のお産婆さんのように先住民の文化への配慮が欠かせません」と石原専門家は指摘する。この国では公立病院の診察料は無料で、費用はすべて国が負担している。備品も人手も足りない中、どうすれば地元の文化を大切にしながら医療サービスを提供できるか。日本の専門家とグアテマラの医療従事者たちは、今日もお産さんと子どもたちのために力を合わせて奮闘している。

母さんと赤ちゃんの命を守るための知識を広め、病院でのお産や産前・産後検診を呼び掛けている。

**ゲームを通して
母子の危険と対応を学ぶ**

「母と子ども健康プロジェクト」は、グアテマラ西部の三つの県で、安全なお産を普及させる取り組みだ。

内戦の犠牲者や先住民が多いこの地域では、昔ながらのお産婆さんを頼って自宅で出産する女性が多い。しかし、この国のお産婆さんの多くは正規の医療訓練を受

けていない上、病院のような設備がない場所で産むので、トラブルが起きた時に十分な対応ができない。また、救急病院には超音波診断装置がなく、産前検査の受診率も低いので、危険なお産の兆候を見逃しやすい。こうした要素の積み重ねが、高い死亡率の原因となっている。

そこで開かれたのが、ピンゴゲームを使い、乳幼児や妊産婦の危険な兆候とその対応法を学ぶ母親教室。人見知りが多い田舎のお産婆さんたちも、ゲームなら抵抗が少ない。こうした工夫が功を奏し、

参加者からも、家族計画の立て方や妊娠中の注意、乳幼児の栄養など、学びたいテーマに関するリクエストが寄せられるようになった。

実は、これまでは国の支援や医療関係者間の連携不足に加え、女性の外出に家族の男性の許可が必要な保守的な風土もあり、こうして母親たちが集まることは難しかった。医療機関の関係者に母親教室の重要性を伝えるとともに、参加した女性たち自身が「自分の体についてもっと知りたい」と考えるようになったことから、教室の開催が続いている。



良く似た背景を持つメキシコ・ベラクルス州の専門家と意見交換し新たなアイデア「アミーガ」が導入された

「グアテマラでは、都市部以外で住民が診療を受けられる医療施設は、保健省が管轄している地域保健センターくらいしかありません。しかし質があまり高くなく、住民も行ったがらないので、軽い病気でもこじらせがちです」と、「母と子ども健康プロジェクト」の石原尚子専門家は言う。

グアテマラは、他の中米諸国と比べても、出産前後の女性や子どもの死亡率が高い。そこで、同国保健省と日本の専門家が協力して、医療の質を高めると共に、お



ピンゴゲームを使うことで、お産さんたちも参加しやすくなった

「母と子ども」のいのちを守る

中米最大の人口を抱えるグアテマラ。地方では今も、出産で命を落とす女性や子どもが多い。新しい命の誕生を守るため、日本の専門家とグアテマラ医療従事者が力を合わせている。



先輩ママたちが新米ママの頼もしい友達に



「病院で産む」は当たり前じゃない

出産は、女性にとって人生の大きな節目であると同時に、もっとも危険なイベントでもある。日本では20世紀初めごろは10万の出生に対して約400人の女性が亡くなっていたが、2010年には5人まで減った。同じ年、グアテマラでは10万の出生に対して120人の女性が亡くなっている。赤ちゃんの死亡率も、日本の1000人に1人に比べて、グアテマラでは15人。これほど状況が違う最大の理由は、日本ではほとんどの女性が病院で出産するが、グアテマラの田舎町ではそれが必ずしも当たり前ではないからだ。

